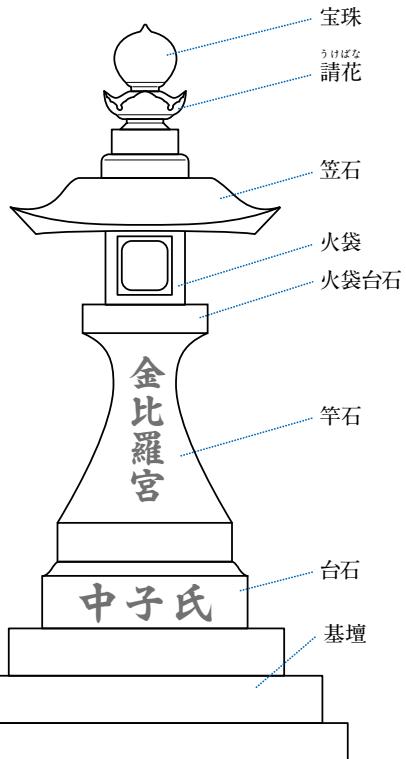
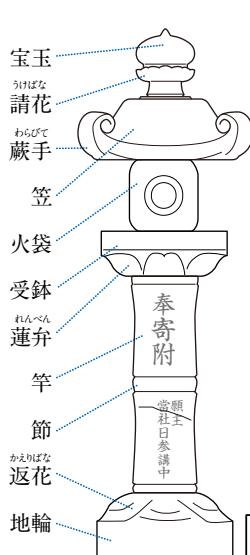


常夜燈・燈籠について

常夜燈・燈籠の各部名称



足守川両岸にあった常夜燈たちは今…

43西向常夜燈(高さ4.54m)



明治19年(1886)大水害の後、大橋西詰に建造。その後幾度の再建・移設を経て、現在は吉備公民館敷地内に復元展示されている。

44大橋常夜燈(高さ3.4m)



慶應4年(1868)、大橋東詰に建造。昭和43年、大橋の架替えで須佐之男神社に解体仮置きされたが、平成19年、現在地に復元展示された。

45高田常夜燈(高さ2.35m)



文政13年(1830)、高田橋東詰に建造。昭和43年、河川拡張時に新しくできた堤防東側に移築された。

今も人々の心を灯し続ける常夜燈。

街灯・灯台として

庭瀬・撫川地区は水路の多い地域なので、常夜燈は夜道の街灯としてはもちろん、水路の灯台として随所に設置されていた。特に庭瀬港跡には、ひときわ大きな常夜燈⁴⁶が設置(復元)されている。

さらに足守川に架かる橋(大橋、高田)には常夜燈が設置されていた。昭和43年、川の拡張工事に伴って廃棄処分されようとしたが、地域の人の尽力により、^{43 44 45}は今も大切に移築保存されている。

道標として

また当地区は鴨方往来に面しており、金毘羅参り、吉備津宮参りの人々も多く通ることから、道しるべの役割も果たしていた。笠石部分に「金比羅宮」「吉備津宮」と刻まれているものも多い。

燈籠として

神社の常夜燈は燈籠とも呼ばれ、神仏を供養するために昼夜を問わず灯し続ける灯明として、境内や参道沿いに一対で置かれている。また題目石や地神等とともに置かれた小さな燈籠も多く見られる。庭瀬八幡神社には庭瀬藩主により立派な燈籠が奉納されている。

地域のシンボルとして

台石や基壇に刻まれた寄附者を見ると、講中、村中、氏子中など、地域の人々がお金を出し合って作ったものが多い。それらの常夜燈は、今では実際に灯されることは無いが、先祖から引き継がれた神社や街のシンボルとして、今も地域の人々の心を灯し続けている。

①庭瀬八幡神社燈籠(高さ2.46m)



庭瀬板倉家三代藩主勝興が奉納した一対の燈籠＝宝曆元年(1751)

46 庭瀬港跡常夜燈(高さ6.52m)



庭瀬港跡に復元された常夜燈(灯台)

現存のものは平成19年(2007)に岡山市町並み整備事業として復元。

初代常夜燈は、元禄13年(1700)に建造された記録がある。

③撫川八幡神社燈籠(高さ1.65m)



この地域最古の燈籠＝正徳5年(1715)

20 題目石燈籠(高さ1.68m)



中田公民館に隣接＝文政5年(1822)